

# オックスフォードと意味の階梯： 「総合人間学」という理念に寄せて\*

丸山 善宏<sup>†</sup>

オックスフォード大学は英語圏最古の大学として千年に近い歴史<sup>1</sup>を持ち、街中に立ち並ぶ荘厳な建造物の群は、その悠久の歴史の重みを静かにまとっている。大学を一つの全体として存立させる「キャンパス」という、北米由来の近代的概念はそこには存在せず、街の中にただ点々とコレッジ<sup>2</sup>や学科の建物が散在しているだけである。そのため一個の纏まった大学というより、雑多なコレッジの集合体なのだとと言われることもある。そこでは複数性が単数性を、多様性が一様性を凌駕している。

各コレッジは大学から独立した一個の機関である。それぞれ独自の自治と資産運用のシステムを持つ。例えば St John's College は広大な土地に加え、Lamb & Flag という名のパブまで所有しており、Thomas Hardy の『日陰者ジュード』はそこで著されたと言われる<sup>3</sup>。実を言えば、学科 (Department) という概念も「最近の発明品」(Foucault) であり、私の所属する計算機科学科も 2 年前までは Computing Laboratory という名称であった。この種の注釈にはしかし際限がなく、この辺で切り上げたい<sup>4</sup>。

---

\*本稿は京都大学総合人間学部の機関誌『人環フォーラム』に寄稿した記事の原稿。最後にオックスフォードのコレッジの写真を二葉掲載。

<sup>†</sup>プロフィール：京都大学総合人間学部(理系入学)卒、文学研究科修士課程修了、現在オックスフォード大学博士課程(計算機科学科、量子情報研究室)在籍中。研究テーマは一貫して「双対性」の数学と哲学。その諸学問への解釈的適用。数学の枠を超え論理・計算・量子論等至る所に観察される「認識論と存在論の双対性」を探求。研究論文のほか双対性理論の紹介記事も執筆：「圏論的双対性の『論理』」、『数学セミナー』2012年5,6月号、日本評論社(書籍『圏論の歩き方』に改訂版収録)。

<sup>1</sup>ケンブリッジ大学は、オックスフォード大学の学者が移住してできた後発の大学である。

<sup>2</sup>ハリー・ポッターの映画の舞台として Christ Church College が使用されたのはよく知られている(不思議の国のアリスの著者も同じコレッジにいた)。大体あのような雰囲気のある所である。米国の「カレッジ」の概念と区別するため「コレッジ」と呼ぶ。

<sup>3</sup>英国で最もリッチな entity はクイーンであり、二番目は St John's College であるとさえ言われる。本格的なパブはなくともバーなら多くのコレッジにある。

<sup>4</sup>オックスフォードに関するさらなる雑学に興味のある方は、私のウェブページ(名

私がまだ総合人間学部にいた頃、Faculty of Integrated Human Studies という所属名で、論理学の国際学会に参加したことがあった。自身の発表を終え一息ついていると、聴衆にいた外国人から「君の学部は一体何の学部なのか」と尋ねられ、しばし答えに窮した覚えがある。今再び同じ質問をされたなら躊躇せず「総合人間学部とはオックスフォード大学のコレッジのような所だ」と返答するだろう。歴史や社会的在り方を言っているのではない。そこにいる人々という内実を指してのことである。

そこには哲学や文学の道を志す者もいれば、数学や物理学を究めようとする者もあり、そしてまた、自分だけの未だ名もなき「総合人間学」を夢想する者もいる。加えて、特に何をするわけでもない自堕落な者や遊び人、制度化された知や生に反旗を翻す無頼派のような反抗者だっているに違いない。この意味で、各コレッジは多様な人物を包み込む一つの宇宙 (Universe) の様相を呈しており、その総体としてのオックスフォード大学はさながら多宇宙世界 (Multiverse) のようなものである。

私は量子情報や量子論一般の数学的基礎を研究する、Quantum Group という名称の研究室に所属している。思想的には「情報」という概念を基礎として物理学を革新する Information Physics という潮流と近い<sup>5</sup>。このグループに計算機科学出身の者はほとんどおらず(二人の教授は物理出身と哲学出身)、数学や物理は勿論、言語学や経済学においても仕事をするため、一体何学科なのかと訝しむ人が多いのも不思議ではない。

ここもまた一種の総合人間学部であり、私の考えでは、圏論という数学による(論理実証主義のものとは異なる)新たな「統一科学」を志向している。過度の専門分化の果てに、大きな全体像、世界像、或は自然観を描けなくなった、近代科学の細分化の暗闇に一筋の光をさすものとして、その新しい統一科学の試みは確かに望みのあるものであると私は認識している。それは丁度自然科学と人文科学の新たな(圏論的)融合を可

---

前で検索するとすぐに見つかります)にある Oxford Blog をご覧下さい。

<sup>5</sup>世界は認知的「情報」の一体系に他ならず、その向こう側に措定される「実体」は我々の認識機構がその(現象学的)情報をプロセス(情報処理)した結果生まれる想念に過ぎない、そう考えるなら情報科学はそれ自体「万物の理論」であるとさえ言える。量子計算も量子状態を情報と捉え、量子状態のユニタリ発展(や観測)を情報処理と捉えることにより成立している。これは他の DNA 計算などの場合でも同様で、世界は計算プロセスの構造なのだという認識は実際的にも有効であり、哲学的には Whitehead のプロセス哲学等と親和性を持つ。量子計算の礎を築いたパイオニアである David Deutsch は今もオックスフォードにおり、大学は全体を挙げて量子論研究を推進している。量子計算は、EPR パラドクス(特にエンタングルメント)という、我々の世界観を根底から揺るがす「哲学的心配事」を、一種の計算の「リソース」と捉えることにより可能になったと言われる。

能にするものであり、「総合人間学」という学際的理念の一つの具現化とさえ言えるのではないだろうか。

しかし研究分野が広大な領域に跨がっていると、実際何を学び何を研究するかというのは大問題である(総合人間学部生にとってもそれは大問題だろう)。さらに言えば、何を学ぶかというのは、そもそも何かを学ぶうとするあらゆる人間にとっての問題である。しかし人間には学ぶ道も学ばぬ道もあるのであり、「何を学ぶか」という問題以前に「なぜ学ぶか」ということがより根源的な問題として立ち現れる。この問題に正面から答えることは私の手に余るが、少しだけ考えを進めてみよう。

そもそも今やっていることをなぜやっているのか?折に触れて問うてみたい。自分にも他人にも、この問いを問うその一瞬の間にも。日常に追われて多忙だったり、特に現状に不満がなかったり、不満があっても意欲がなかったり、ひとはともすると、自分の在り方(existence)に対する意識を失い、Das Man (Heidegger)つまり「ただの人」として「なんとなく」生きてしまう。ひとは弱い葦であり、しかもそれほど考えない<sup>6</sup>。

研究者なら、なぜ自分は研究するのかと問うことになる。行為の理由を説明するには、大雑把に言って、情緒に訴える方法と、理性に訴える方法の二種類がある。面白いから研究するというように「嗜好」を重視する人もいるし、重要性を主張できる何らかの理由により「すべき」だから研究するというように「当為」を重視する人もいる(通常両方が混じる)。

しかし現実においてはしばしば、行為は完全に動機づけられることがなく、最終的には一つの決断(あるいは実践)として生起する。何か(今の場合は学問)を「する理由」も「しない理由」も多様に考えられる中で、個々の理由に重みをつけ、結局いずれの理由がより多いかという問いにははっきり答えることは難しい。最後にはえいやっと決めるしかない<sup>7</sup>。有り体に言えば、理由や動機など大抵後付けの捏造品に過ぎない<sup>8</sup>。原理的に言うなら、規則に従うことが実践的決断である(Wittgenstein 或はその Kripke による解釈)と同様、理由に従うことも実践的決断なのである<sup>9</sup>。

<sup>6</sup>でも、それは悪いことか。文字通り常に意識的であることなど人間にはできない。日々の生活では多かれ少なかれ意識の盲目状態に陥らざるを得ない。Albert Camus などはこの「意識的であること」に最大の重点を置き、重要なのは善く生きる(Socrates)ことではなく、多く生きることであると言う。私が留学することを決めたのも一つには Camus の意味で多く生きるためだった。

<sup>7</sup>物理では数学的正当化のない計算を遂行する際のかげ声としてこの言葉を使うというが、それは物理学者の物理学者としての決断の表明なのだろう。

<sup>8</sup>諸学問の「基礎論」や、一般に「理論」も、同様に後付けの側面が多分にある。「基礎は現実にはぶら下がっている」と言われる。

<sup>9</sup>いわゆる rule following の問題で「言葉には確定した意味が存在する」という常識

Albert Camus の「善く生きるのではなく多く生きる」という考えを敷衍すれば、Socrates 的「善く生きる」の「善く」は時代、社会環境や個人の状態の関数だが、「多く生きる」の「多く」はそうではない。それはただ鋭敏な意識の多寡にのみ、従って個人の在り様にのみ依存する。そのために生きそのために死ぬるような絶対的理念 (Kierkegaard) など凡そ存在しないだろうが、それでも極大限の鋭敏な意識を持って「多く生きる」ことは人間にとって絶対的な仕方である。私は学問と研究を、こういった Camus の意味での「多く生きる」ための方途として認識している (勿論、それが唯一の可能な道だということではない)。

しかし、以上によって「なぜ学ぶか」について全てを述べたような気は全くしないし、これは結局のところ一時の一つの考えに過ぎない。これとは矛盾する別の考えに共鳴することもあるだろう。Camus は、「ひとつの見方だけに満足し、精神の次元に属するあらゆる力のなかで、おそらくもっとも精妙な力である矛盾をみずから禁じてしまうのは困難なことである」と述べている<sup>10</sup>。

同時に注意すべきは、絶対性のパラノイア的希求、「アルキメデスの点」への憧憬、そして意識的な個人ないし人間といった概念自体がある種の歴史的発明品 (Foucault) であり、以上の問いの立て方そのものを蝕んでいるという看過し難い側面だろう。しかし何人も歴史的な文脈から独立などできない (Foucault 自身の考えもまた特定の時代の特殊な産物だと言ってよい) のであり<sup>11</sup>、その意味でこれもまた決断の問題であると言わねばならない<sup>12</sup>。

この手の話に終わりは無いが、紙数と人生には終わりがあがる<sup>13</sup>。

---

的な考えに鋭い疑義を投げかける。

<sup>10</sup> 『シーシュポスの神話』(清水徹訳、新潮文庫) p.94.

<sup>11</sup> Camus は、自分が(そして誰もが)歴史的な文脈から完全には逃れ出られないことを知っており、いかなる文脈をも超越した特権的視点や普遍的意味を振りかざすことを「哲学的自殺」と表現した (Sartre や Husserl などをもその例として挙げている)。

<sup>12</sup> だが幾ら決断しようとも、芥川龍之介的「唯ぼんやりした不安」はいつもそこで待っている。

<sup>13</sup> 最後に、総合人間学部在籍時の指導教官の櫻川貴司先生と、この記事の執筆機会を与えて下さった立木秀樹先生に感謝したいと思います。外国人研究者にバックグラウンドを問われて「総人」の話をする、ユニークで素晴らしい所だとよく言ってくれますし、何より私自身総人で学んだ事を誇りに思っています。総人に関わりを持つ人々が皆揺るがぬ dignity を持って生きられることを願って止みません。「総人」というのは「学」の理念であると同時に「人間存在」の理念でもあるべきだと思うからです。



図 1: 最多の英国首相を輩出する Christ Church



図 2: 最古と言われる Balliol College の Hall